

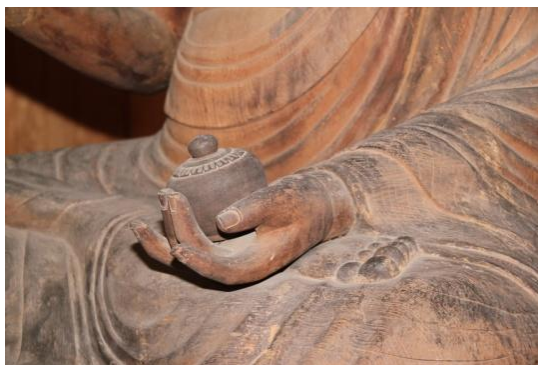
重文・薬師如来座像

国の重要文化財 <薬師如来座像> 参考：新城文化財案内

平安時代に繁栄した紫雲山大脇寺しうんざんの本尊です。昭和17年（1942年）に大脇寺りんこうじが廃寺となったため、林光寺かおうの所蔵となりました。平安時代末期（藤原時代）、嘉応3年（1171年）、仏師頼与よりよの作であり、像の高さ130cm、アスナロ材いちぼくの一木造りである。

像のつくりは、平安時代後期の像に共通した前後の厚みが薄い姿で、衣の線も穏やかな浅い切り口を示している。しかし、頭部には鎌倉様式へのめばえが見えている。例えば、眼の上下に強いうねりを見せ、ほおにはわずかに抑揚があるなど、個性的な表現が見られるのである。彫刻の特徴として、一木造いちぼくづくり（首と胴体が一本の木で造られる）、翻波式ほんぼしき（衣文の表現に鋭いひだとなだらかなひだを交互に刻み、波形のようにくり返し表現する彫り方）がある。量感に満ちたふくよかで神秘的な雰囲気なたたえているのがこの時代の特徴とされており、大脇寺の薬師如来も、鎌倉時代の先がけといえる作品である。

昭和28年、解体修理がなされ、その時、頭部の内側に「嘉応3月正月15日云々」の銘文が発見された。また、後背こうはい、台座、及び薬壺やくこはその時、作り変えられたものである。制作時代と作者が明らかで、しかも、鎌倉時代への先がけの好例として注目されている。この薬師如来は通称「庭野のお薬師さま」で親しまれ、昔から病気に悩む人に信仰されてきたという。特に眼病に効果があると信じられ、ひらがなの「め」の字の連続で「め」と大書して治癒ちゆを祈願する人がある。



作り変えられた薬壺



重文 薬師如来座像